高尾山報 令和元年5月号 毎月1回発行 通巻第664号

高尾山報

令和元年5月号

春祭 稚児等(ら)によって 甘茶佛

奉祝 新天皇陛下御即位・新元号「令和」制定

粛啓　新緑の候　益々の御清詳の段　お慶び申し上げます。

平成の御代において、日本国の象徴として国民に寄り添ってこられた天皇陛下が御退位なされ、五月一日に新たなる「令和」という新元号のもと、皇太子・徳仁親王殿下が第百二十六代天皇陛下に御即位なされ大慶至極に存じます。

御即位にあたり高尾山におきましても、御本尊・飯縄大権現様に今上陛下の玉体安穏、萬国和平、萬民豊楽をお祈り申し上げました次第であります。

平成年間は、東日本大震災などの数多くの自然災害に見舞われ、人々の心の在り方に迷いが生じた時代でもありました。

この様な時こそ、古来より日本人が大切にしてきた聖徳太子の教えである「以和為貴」の精神を心中に留め、精進努力を重ね、新元号「令和」という言葉に込められております、「人々が相和して文化を育む」という理想を目指すことが肝要と思われます。

人間が互いを尊重して信頼し、感謝し合う、共に幸福で平和な社会を祈念致すものであります。

合掌

令和元年　五月吉祥日

高尾山主　大山隆玄

花まつり（釈尊降誕会）

四月七日(日)八日(月)

お釈迦様生誕の日と伝わっている四月八日には、お釈迦様の誕生を祝福する「花まつり」が日本各地で行われております。

高尾山では、有喜苑に昭和六年（一九三一）タイ王国より日本ボーイスカウト連盟が「健児の仏舎利」として拝受した、お釈迦様の真身骨を安置した仏舎利塔があります御縁から、毎年四月の第一日曜日に各地より集まったボーイスカウト会員により花まつりが行われており、本年は七日に行われました。

八日には、仏舎利塔において山内僧侶による法要が厳修され、花で飾られた「花御堂」の中に立つお釈迦様の誕生仏に甘茶が灌がれました。

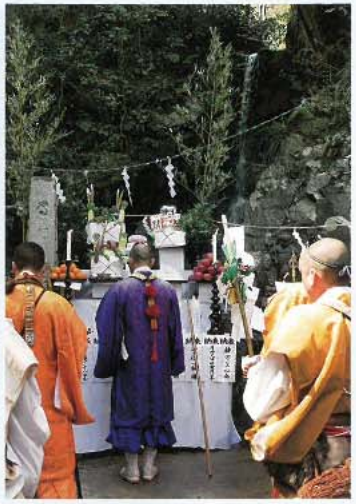
花御堂の誕生仏に甘茶が灌がれる

大勢のボーイスカウトの皆様が参加されました

開瀑式厳修

四月一日(月)

高尾山には、蛇滝・琵琶滝という二か所の水行道場があり、毎年四月一日には両道場において、滝場における一年間の安全を祈願する開瀑式が行われております。



蛇滝(左)と琵琶滝(右)で行われた開瀑式

法の水茎 (83)

大正大学講師　髙橋秀城

この五月より新天皇がご即位され、いよいよ新元号「令和」が始まりました。

皆さまはこの「令和」という元号を、どのように受け止められましたでしょうか。私は発表の瞬間をテレビで観ていましたが、新元号が書かれた額が掲げられる前に、少し机との隙間から漢字の上の方の「人」（ひとやね）が見えたので、一文字目は「命」なのかと思いを廻らしました。「令和」という文字と響きと聞いたとき、これで平成が終わるという寂しさと、新時代の幕開けを感じる喜びとが入り交じって、なんとも言葉では言い表せないような気持ちになったのを覚えています。

その後「令和」は、日本最古の歌集である『万葉集』の一節が出典と発表されました。

時に、初春の令月にして、気淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。

（『万葉集』「梅花の歌一序」）

（時まさに新春の喜ばしい月、空気は心地良く風は穏やか。梅は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は身にまとったお香のように芳しい香りを漂わせている）

奈良時代の天平二年（七三〇）正月十三日（太陽暦では二月八日）、公卿で歌人でもあった大伴旅人（六六五～七三一）の邸宅において、新春の宴が催されました。そこに集った人々によって詠われた「梅花の歌三十二首」に対する序が、令和の出典として選ばれたのです。

前半の、「初春の令月にして、気淑く風和ぐ」の箇所は、日本でも広く読まれた中国の詩文集『文選』を踏まえていることや、中国の書家として有名な王羲之（三〇三～三六一）「蘭亭序」の、

是の日や、天、朗らかに、気清く、恵風和暢せり。

（王羲之「蘭亭序」）

（この日、天朗らかに、空気は清らかに澄んで、心地良い風が穏やかに吹いている）

を範としていることなどが既に指摘されています。この「蘭亭序」は、中国の珠玉の詩文を集めた『古文真宝』という書物にも収められていることから、詩文の模範として、多くの人に読み継がれてきた漢詩でしょう。

序の後半、「梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」の箇所は、「梅」と「蘭」、「前」と「後」が対句として用いられており、格調高い文章となっています。時代は下りますが、嵯峨天皇（七八六～八四二）の「閑庭の早梅」という漢詩にも、

庭前、独り早花の梅有り
上月風和らぎて、満樹開く

（『経国集』）

（庭には早咲きの梅のみが香っていて、空には上弦の月がかかり、風も和らいで梅が咲き溢れている）

として、穏やかな春風のもとで白梅を愛でる様子が詠われています。こうした季節の移ろいに思いを馳せ、自然を慈しむ心持ちは、中国・日本を問わず東アジアに共通する美意識といえるでしょう。

ここでは漢詩の一節のみを取り上げましたが、「梅花の歌三十二首」をはじめとする全体を読み進めることによって、さらに古の人々の「まこと」（真心）が立ち現れてくるものと思います。

梅の花は古くから歌に詠まれてきました

高尾山来山者安全祈願祭

四月六日（土）

去る四月六日（土）、高尾山若葉まつり開催式が行われました。本年は五月二十六日（日）まで、土日・祝日を中心に様々な催し事が行われます。

山伏を先頭に山麓の不動院まで、伊勢丹立川支店の皆様や、高尾山商店街の関係者が咲き誇る桜の下を練り歩き、飯縄権現遥拝社御宝前にて、菅谷執事長御導師の下、来山者安全祈願祭が執り行われました。

その後、ケーブルカー清滝駅前会場にて若葉まつりの開会を祝して、八王子車人形の西川古柳座の皆様による公演が行われました。

登山者の安全を祈願し桜咲く参道を練り歩く

八王子車人形の西川古柳座による演目『三番叟』

高尾山薬王院
代々木祝殿
高尾山商店街
高尾山商工会
高尾名物蒟蒻
高尾駅前飲食組合
高尾山商店
うか
キリンビール
アサヒビール
佐久間製菓
吉川製菓株
伊藤園
マルホ水産
有市野製紙所
有相模物産
有木村屋酒店
美好屋
多摩信用金庫
有田村商店
株相模製紙所
高銭交通株
坂福
大原屋商店

影ひたす水さへ色ぞ緑なる四方の梢の同じ若葉に

（『六百番歌合』藤原定家）

（影を写す水の色までも緑に見えるよ。辺り一面の木々の梢が全て同じ若葉なので）

「高尾山十景」に選ばれた「四号路のブナ芽吹き」も、そろそろ新緑へと移り変わる頃でしょうか。高尾山は、東京近郊では非常に珍しいブナ林の宝庫でもあります。

ブナの木が、山の麓から山頂へと芽吹いていく様子を「峰走り」と言います。それはまるで、先日までの桜色の上着を脱ぎ捨てて、新緑の夏衣をまとったかのような装いです。

野辺の色も春の匂ひも をしなべて心染めける悟りにぞなる

（西行『山家集』）

（秋の野辺の色も、春の花の匂いも、すべてが仏様のお姿。幸せそのものです）

この爽やかな五月に、ブナの峰走りを眺めながら、高尾山に分け入ってみませんか。お山は今、春の桜、秋の紅葉にも劣らない、みずみずしい若い息吹に溢れています。新しい時代の幕開けを祝いつつ、古の人々が自然の移ろいに思いを馳せたように、「可愛らしい若葉に「お芽出度う」の気持ちを贈ってみてはいかがでしょうか。

（栃木北部教区普濟寺）

子供達の健やかなる成長を祈る

春季大祭奉修

四月二十一日(日)

みんな一緒に御稚児さんです

健やかな成長を願いお釈迦様に甘茶を灌(そそ)ぐ

絹太鼓保存会による奉納太鼓

家族そろってハイポーズ

大本堂にて熱祷(ねっとう)する菅谷執事長

高尾山慶賛会の侍の皆様

有喜苑における柴燈大護摩供

八王子消防記念会による勇壮なはしご乗り

原獅子舞が厄を払う

浅川中学校ブラスバンド部の演奏

『万葉集』から見る日本の古典 29

獨協大学特任教授　城崎　陽子

文武期 ―その1―

この五月に御代替わりが行われ、「平成」から「令和」という元号に改められた。新しい元号については、『万葉集』巻五に収められている「梅花の歌三十二首　并せて序」と題される一連の作品の序文に収められている部分を用いたものであることはすでに知るところであろう。「初春の令月にて、気淑く風和ぐ。」として、睦月を「令月（よき月）」として段々と春めいてくる様子を詠う。これを元号に用いた理由には、さまざまあろうが、やはり、「ことよし（事良し）」としてその登極の御代を予祝しているにほかあるまい。

当該の漢文の序には、出典が指摘されていて、王羲之（三〇七～三六五）の『蘭亭序』や長衡（七八～一三九）の『帰田賦』がそれにあたる。王羲之は、中国、東晋時代の能書家で、中国、日本において書聖として尊ばれている。東晋の建国に功労のあった王導の従弟・王曠の子で字は逸少。琅邪臨沂（現在の山東省臨沂県）の人。宮中の典籍をつかさどる秘書郎をはじめとし、会稽王友、臨川大守、江州刺史、護軍将軍を歴任した。名門の出身であったが、中央政府の地位を求めず、永和七年（三五一）には右軍将軍、会稽内史に任じられ、会稽郡山陰県（浙江省紹興府）に赴任した。この官名により王右軍と称される。彼が三五三年三月、山陰県の名勝「蘭亭」に時の名士謝安、孫綽らと会合し、詩を賦したことは有名で、曲水の宴として後世に伝わる。四年間の在任ののち辞任して、以後は自然に心を寄せ隠逸生活を送った。

一方、長衡は、中国の後漢時代の科学者・文学者である。字は平子。河南省の南陽西鄂の人。安帝・順帝に仕え、天文暦法や史料編纂の長官に当たる太史令となり、さらに後漢では最高の官の尚書にまで栄達した。文学の才にたけ、「西京賦」「東京賦」「南都賦」「思玄賦」などの詩賦を書き、また七言詩成立途上の一時期を画す「四愁詩」を作った。出典として話題になっている『帰田賦』も含め、これらはすべて『文選』に収められてる。『帰田賦』の当該部分は、「仲春の令月、時和し気清む。」とあり、「梅花の宴三十二首并に序」はこれを踏まえている。時をよき月として、時が和み、気も清々しくなってゆくというのは、段々と御代が開けていく様を予祝しているようである。

日本で元号が用いられた始めは孝徳天皇のときの「大化」で、六年後には初めての改元があり「白雉」となった。しかし、その後元号の使用はしばらくなく、天武天皇最晩年に「朱鳥（あかみどり）」という元号が立てられたと日本書紀にはあるが、現在まで不断に続く元号の始まりは文武天皇の御代、七〇一年の「大宝」からである。

阿騎野万葉公園の人麻呂像

さて、先々回は天武・持統両朝にわたって律令国家体制が固められていく過程で生み出された「天皇即神思想」について触れた。先回は天武天皇の遺業を継いで持統天皇が完成させた事柄について、中でも都城について記した。

持統天皇十一年（六九七）二月、孫の軽皇子が皇太子となった。続く八月に譲位があり、第四十二代文武天皇となった。天武天皇と持統天皇の一粒種である草壁皇子の子で、早世してしまった草壁皇子にかわって、天武皇統の正当な後継者と目されていたことが、柿本人麻呂の安騎野の歌からうかがうことができる。周囲の期待を一身に集めての登極であった。

軽皇子、安騎の野に宿らせる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　京を置きて　こもりくの　泊瀬の山は　真木立つ　荒き山道を　岩が根　禁樹押しなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　安騎の大野にはたすすき　篠を押しなべ　草枕　旅宿りせす　古思ひて

（巻一・四五番歌）

短歌

安騎の野に　宿る旅人　うちなびき　眠も寝らめやも　古思ふに

（巻一・四六番歌）

ま草刈る　荒野にはあれど　もみち葉の　過ぎにし君の　形見とそ来し

（巻一・四七番歌）

東の　野にかぎろひの　立つ見えて　かへり見すれば　月傾きぬ

（巻一・四八番歌）

日並の　皇子の尊の　馬並めて　み狩立たしし　時は来向かふ

（巻一・四九番歌）

安騎野は奈良県宇陀郡大宇陀町にある野を指す。狩猟地として有名であり、「宇陀の野」ともよばれる。軽皇子は狩猟に向かう前日にここへ「旅宿」をした。それは、繁栄している都を後にして、わざわざ泊瀬（当時、被葬地としての認識もあったとされる）を超えて至りついた場でもあった。そこは、「短歌」にみられる「古」を思い起こす空間であり、「君（草壁皇子）」の「形見（忘れがたい）」の地でもあったのである。そして、「東の野にかぎろひ（朝もやとされる）」が立ち、いよいよ「その時」はやってきた。狩りがはじまるのであった。

文武天皇の御代、七〇二年に「大宝律令」が制定発布された。律令官制が整っていく中、天子は執政者であると同時に天が認めた有徳の人でなければならなかった。偉大な祖父母を持ち、早世してしまった父の忘れ形見として一身に期待を集めた即位は、むしろ、文武自身の苦悩を増すことになったのである。このことについては、次回に触れることとする。

折り折りの記 (117)

高尾山に源平偲ぶクマガイソウ

波多野　重雄

高尾山に五月はじめに登り、あちこち歩いているとふと、花は白っぽい黄色にうすい緑色を帯び、紅紫色の筋が網の目状にあり、しわが多く花びらの内下側の一枚、唇弁と言われる部分が袋状の形をしている、「クマガイソウ」が咲いていた。

この花は鎌倉時代の源氏の武将熊谷次郎直実に由来するという。私は子どもの頃、村芝居で食堂の大きな小父さんの熊谷次郎直実が小学生の友達の平家の武将平敦盛を波打ち際に呼び戻し討ち取る場面を涙ながらに見た感激を忘れない。

菱山忠三郎著「多摩の草木記」（参）

（高尾山健康登山の会々長）

百観音霊場巡礼 (26)

厚木市　荒井　一雄

夏遊安養院

薫風　払古都

名園　開百花

勝景　相不変

山月　照夏華

むらさきの　藤波かをる夕暮時　君の黒髪ほの思ばるる

夏、安養院に遊ぶ

薫風、古都（鎌倉）を払ひ、名園に百花開く…

勝景（素晴らしき景色）は相変はらず…

山月は夏の代表花・ツツジを照らし出す…

高尾山物語 13

北条氏照の寺領寄進

絵・橋本豊治

於相田三千疋　永寄進申候、
可被抽精事肝要候、恐々敬白
三月　二日　氏照（花押）

（高尾山薬王院文書　北条氏照書状）

北条氏康の三男として生まれた氏照は、兄である四代目当主の氏政を補佐し、小田原北条氏の隆盛を支えました。

氏照は、現在の八王子周辺を支配していた大石氏の跡継ぎとして養子になり、多摩地域の平定を押し進めました。

永禄四年（一五六一）には薬王院に対し、椚田郷の内に三千疋（一疋＝二十五文の換算で七十五貫文）の土地を寄進したとみられており、この寄進は多摩地域平定のための戦勝祈願という見方もあります。

氏照はその後、青梅谷の三田氏を滅ぼし、多摩地域を手中に収め、以後は東方の下総・上総（現在の千葉県）や北関東方面を転戦して、北条氏の版図拡大に貢献しました。

いつまで殻に
閉じこもってる
外に目を向け
動き出せ

弾き語りフェス　高尾山どっこいショウ　三月三十日（土）

去る三月三十日高尾山上において、ロックバンドの「グッドモーニングアメリカ」でボーカルを務める金廣真悟さん企画の弾き語りライブ『高尾山どっこいショウ』が開催されました。

有喜閣大広間のライブ会場では、金廣さんの他に四組のアーティストによる演奏、精進料理の昼食に際しては、二組のお笑い芸人によるお笑いライブがそれぞれ行われて、参加の皆様は大いに盛り上がりました。

金廣真悟さんの弾き語りに聞き入る

おはなし散歩道

大ちゃんの稚児行列

柏市　木村　研

明日は、高尾山の稚児行列です。

大ちゃんのお父さんも子どものころに参加したことのあるパレードです。だから、おばあちゃんが、「天狗さまに見守られて、賢く、健康で逞しくなりますように」と、早めに申し込んでくれました。

夕食の後、天気予報を見ていたお父さんが、「明日、大丈夫かなあ」と、いいました。

天気図にカサのマークが、たくさんついているからです。

「どうしよう?」

大ちゃんは、おばあちゃんを見ました。

「そうだねえ。てるてるぼうずでも作ろうかね」

おばあちゃんが、てるてるぼうずを作って、「強そうな顔を描いてくれ」と、いいました。

大ちゃんは、サインペンで、ぎょろ目の怖そうな顔を描きました。

「これならカミナリさまも逃げだすね」

おばあちゃんがいいました。

大ちゃんは、てるてるぼうずを窓の外につりさげて、命令するようにいいました。

「明日は、ぜったい天気にしろよ」

次の日、大ちゃんは早起きをして窓の外を見ました。いい天気です。

「ありがとう」

大ちゃんがお礼をいうと、てるてるぼうずは、「夜中に、ちょっと雨がふったけどね」と、いいました。

そのてるてるぼうずの顔が、真っ黒です。水性ペンのインクが流れて、口の回り黒くなっていたのです。

「おじいちゃんみたい」

大ちゃんが笑うと、てるてるぼうずは、

「せっかく天気にしてやったのに、笑うなんてひどいや。ねえ、ぼくも高尾山に連れてって」

と、いいました。

「だめだよ。申し込みしてないんだから」

「いやだよ。申し込んでなくても、行きたいよ」

てるてるぼうずが、泣きそうな声をだすと、空に雲が出てきて、ポツン、ポツンと雨が落ちてきました。

「あっ。泣いちゃだめ。雨が降り出しちゃうよ」

大ちゃんは、大あわてでてるてるぼうずの口を押えました。そして、

「連れて行くから、泣かないで」

と、てるてるぼうずを、デイバックにつけました。

大ちゃんたちは、早めに食事をすませて家を出ました。

そして、受付を済ませると、ケーブルカー下の不動院で着物を着せてもらいました。

「良く似合うよ」

と、おばあちゃんがいいました。すると、てるてるぼうずが、

「ぼくも、着物着たいよ」

と、いいました。

「だめだよ。てるてるぼうずの着物なんか用意してないだろう」

「いやだ、いやだ」

てるてるぼうずが、泣きはじめると、空がピカッと光って、いきなり雨が降りだしました。

突然の雨でみんな大あわてです。

大ちゃんは、おばあちゃんにいいました。

「てるてるぼうずの着物も、作ってよー」

「はい、はい」

おばあちゃんは、ハンドバックからハンカチを取り出して、上手にてるてるぼうずをくるみました。すると、かっこいい着物になりました。

「わあ。お侍さんみたい」

大ちゃんがいうと、てるてるぼうずは、嬉しそうに笑いました。

大ちゃんとてるてるぼうずは、稚児行列のパレードに参加しました。

もちろん、記念写真も一緒です。

（おわり）

（挿し絵・小出　茂）

葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ㉖

明治大学博物館　外山　徹

寛政～化政期の動向

寛政一〇年（一七九八）の正月から紀伊徳川家に対する御札守献上が再開し、山主秀神は藩侯徳川治宝へのお目見えを果たした。享保期（一七一六～一七三六）から続いた祈祷所を再興する悲願がここに達成された。

寛政～文化期の動向

紀州家の篤い帰依をバックボーンとする、一八世紀中後期の一六世秀憲・一七世秀興在住時は、高尾山薬王院の寺勢拡張の時代だった。秀神の時代もまた発展の時期となった。その事績としては、紀州家祈祷所再興に加え、本堂の建立、唐銅製の五重塔建立、寛政一二年から文化三年（一七九九～一八〇六）にかけての境内の大規模な修築事業が挙げられる。

旧本堂は裏山の崩落によって明治一九年（一八八六）に倒壊するまで、現在の書院の位置にあった。安永年間（一七七二～八一）の書院・庫裏・僧坊の整備に次いで、祈祷所再興と同じ寛政一〇年に建立されたと伝えられる。間口九間（一六メートル余）は現在の大本堂の両翼の増築部分を除いた建立当初の規模よりも大きかった。

五重塔は高さ約三メートル二七センチと、銅製の造作物としてはかなり大きなものだった。塔基の銘文には文化九年（一八一二）の建立と記されていたというが、実際には寛政一二年に鋳造されている。戦国時代に北条氏康が寄進したという由緒を持ち、享保二年（一七一七）の大風によって倒壊したが、寛政八年に赤坂裏伝馬町の民間宗教者足袋屋清八が久留米藩主有馬頼貴という大旦那を得て再興を志願したというものである。

寛政一〇年に幕府は、寺社の造作物を規制し、銅像・石像・木像とも丈三尺（約九一センチ）までに限り、撞鐘・鳥居・燈籠の類も大型のものは一切停止するとしたため、一時は建立が危ぶまれたが、先述の由緒による再建であることを理由に許可を得ることができた。困難を克服しての成就に、秀神は塔基の銘文において寺社奉行との折衝にあたった弟子僧方道を讃えている。塔は古写真にその姿を見ることができるが、大正二年（一九二三）の関東大震災、昭和九年（一九三四）の室戸台風による両度の倒壊を経て、ついに再建されることはなく、塔基の台石のみが四天王門の脇に残っている。

寛政一一年からの修築作業の詳細は詳らかではないが、七年間にわたり麓の上椚田村から定期的に延べ一、二五二名の村民が助人足に登山したというものだった。この後、文政年間には地誌や紀行文が相次いで上梓され、高尾山内の様子が細かく描写されるが、その作者たちが目にしたのはこの時整備された伽藍の様子であった。

文化六年（一八〇九）には「江戸田舎日護摩講中元帳」という護摩檀家帳が成立し、当時の檀家圏がわかる。その以前、天明四年（一七八四）までに東方の多摩川沿岸部と北方の飯能周辺、西方は甲斐国（山梨県）東部への伸長が見られたが、その後の四半世紀の間に北は上野国（群馬県）南部、東は江戸に全体の四分の一を占める人数、西は甲府盆地にまで拡大している。先の幕府による造立規制は、それ自体が庶民参詣の熱気を示しているが、秀神の時代、高尾山もまた多くの人々に認知される信仰の山としての地位を確立したと言える。

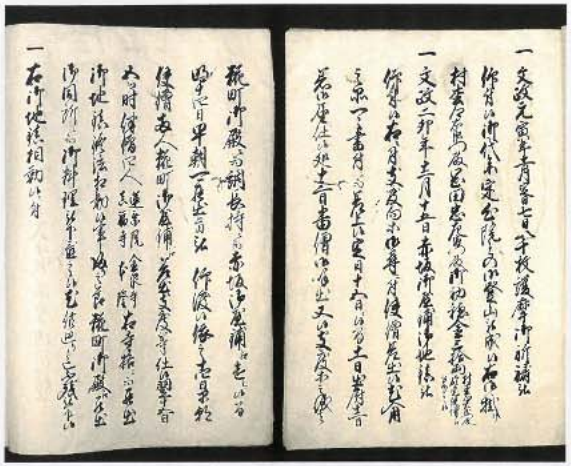
なお、この檀家帳には「紀伊中納言様」と大書され、届けるべき札と供物の内訳、御広鋪御用人・御用達の人数、屋敷内の届先などが広めのスペースを割いて記されている。

文政期の動向

文政元年（一八一八）一一月七日、この日、紀伊徳川家から八千枚護摩供の祈祷を仰せつかったという記録が残る。掛として村松郷右衛門・岡田忠左衛門の名と初穂金三〇両が記されるが、初穂金は使僧が村松宅で受け取ったとある。「ご代参定心院殿ご登山」とあるので、紀州家ゆかりの人物が高尾山を訪れたことになる。存命の人物への院号を付した呼称は、一般的には僧侶か身分ある人物の出家した未亡人に対するものである。残念ながら人物の特定には至っていないが、定心院の名は別の史料にも目にすることができる。

しかし、秀神の寂年はこの年の一二月一二日という記録があり、八千枚護摩供の最中であった可能性もある。実際、それは予期されない死であったようで、後住に一九世秀観が晋山したのは翌年の二月二〇日と間が開いた。

秀観が山主となった年の暮れ、紀州家中屋敷の地鎮祭を執行するという重責を任されることになる。この時の記録は祭場の設営から修法具の一覧まで細かな記録が残っている。去る文政元年八月二二日、赤坂にある中屋敷が火災となり、本殿が焼失するなど将軍家斉から再建費用として二万両を拝領する程の被害をこうむっていた。赤坂の中屋敷は寛政四年（一七九二）にも類焼し、文化八年（一八一一）の火災で本殿が焼け落ち、翌々年の七月に新しい本殿が落成したばかりだったが、わずか五年で再び焼け落ちてしまったことになる。



紀州家中屋敷の地鎮祭などを伝える記録
文政期の動向を伝える記録

薬王院は文政二年一二月一五日、その再建の地鎮祭を仰せつかった。祈祷配札をおこなっていたとは言え、この時薬王院が呼ばれたのは、度重なる火災に対する火伏の効験が期待されたのかもしれない。二三・一四日の両日にわたり準備のため番僧が麹町の上屋敷に出入りし、地鎮祭の当日は五ツ時（午前八時過ぎ頃）から供僧として法類である蓮乗院・金泉院・真福寺の住職、そして弟子僧一名をともない、地鎮の修法を執行した。祭場には三間と二間と言うので畳一二枚分の広さの仮屋が建てられた。仮屋には三尺二寸（一メートル弱）四方の護摩壇をしつらえ、二尺八寸五分（約八六センチ）の燈台が四本、その他記録には数々の修法具が書き上げられるなど大名屋敷の地鎮祭ともなると大がかりである。帰途は「糀町御殿へまかり出で、ご同所にてお料理下し置かれ」と、伴僧ともども振る舞いを受けている。

文政四年（一八二一）三月一日からは、服忌による中断をはさみ、五月一五日までの間、新宿太宗寺において出開帳を執行した。後年の出開帳の際に葵紋付の品を飾り付けることを願い出た書面の末尾では、文政の折に前出の定心院と女中衆が参詣に訪れたことを述べ、同様な参詣を願い出ている。別の書面によると、文政の女中衆参詣は薬王院の側から要請したものではなく、用人の村松郷右衛門からその旨の通知があったということである。

文政の出開帳の頃は赤坂の屋敷を再建している最中で、まだ火事の記憶も生々しかったのかもしれない。女中衆の出開帳参詣については、紀州家側に薬王院に対する利益の期待のあったことが窺い知れる。この出開帳は内藤新宿という当時としては場末で執行されたこともあり、人の入りの少なかったことが記録されているが、紀州家による帰依を再確認するとともに、江戸の人士に対する高尾山のアピールには相応の効果があったものと推測される。このしばらくの後、文政一〇年の『高尾山・石老山記』（竹村立義著）、翌年の『多波の土産』（著者不明）といった紀行文には高尾山参詣の記事を目にすることができる。これは、高尾山が江戸の人々の間に相応の知名度を得ていたことを示しているだろう。

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

観音菩薩の宗教 ⑰

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

モンゴルの開眼観音菩薩

先に筆者は観音菩薩の信仰の人気の理由を「汎用性」と「易行性」という言葉で説明した（「観音菩薩の宗教」第5回）。易行は仏教の言葉であるが、汎用性はそうではない。現代では汎用性というと特にコンピューター用語として知られており、多くの用途や場面で使用できるという意味を有している。専用コンピューターがワープロとかゲームにしか用いられないのに対し、汎用コンピューターはそれぞれのソフトやアプリを動かすことによって多様な能力を発揮することができる。

こうした技術用語を観音菩薩に当てはめることには異論もあろうが、観音菩薩がそうした性格を持っていることも事実である。観音菩薩は衆生の数だけある苦しみや願いに対応し、またそのためにあらゆる姿に化現する。具体的にいえば、オリジナルの聖観音菩薩が三十三観音や密教における変化観音に展開し、いかなる目的にも対応できるようになる。まさに汎用性である。

大乗仏教における多くの仏菩薩や明王などの尊格は、その像容にしても性格や功徳にしても、基本的には経典的根拠を持っている。例えば観音菩薩に関する記述が『観音経』や『カーランダヴィユーハ（仏説大乗荘厳宝王経）』にあり、地蔵菩薩の功徳が『地蔵菩薩本願経』や『地蔵菩薩発心因縁十王経』に説かれているようなことである。しかしそうした経典公認の尊格に対し、世界各地の仏教圏にはそれぞれの土地固有の尊格が産み出され汎用性を示してきた。例えば、東アジアにおいては日本の子育て地蔵や中国の魚籃観音などが挙げられる。同様の例は、漢文仏教圏に優るとも劣らぬ繁栄を見せたチベット・モンゴル仏教圏でも認められる。

歴史上、モンゴルが世界を席捲したのは十三世紀初頭のチンギス・ハーンの時代で、彼が建国したモンゴル帝国は人類史上、最大の版図を支配するに至った。チンギスの建国よりほぼ一世紀のちの一三〇五年、一説にウイグル人とされるチョイジオドセルという多言語に通じた訳家（翻訳家）によって、六波羅蜜を説いた大乗仏典『入菩提行経』がモンゴル語に翻訳され、後にはその注釈書『入菩提行経疏』も書かれた。それ以降、四世紀半に亙り翻訳が続けられ、清朝下のモンゴルにおいて一切経である『ガンジョール』一〇八巻と、その注釈文献の集成である『ダンジョール』二二五巻が木版印刷により出版された。『ダンジョール』は三千四百二十七もの論書すなわち注釈・研究書を収めるほど膨大な叢書であった。モンゴル人の信心の篤さは仏典翻訳のみならず、寺院の造営や仏像仏画の製作、仏事・法要の浸透にも見られた。社会主義革命により仏教が弾圧される直前の清朝末期、モンゴル人男子のほぼ半数が出家していたことからも、モンゴルが国を挙げて仏教に専心していたことが知られよう。

モンゴル仏教は、ホビルガーンと呼ばれる活仏が聖俗を教導、支配するという特色を持っていた。ホビルガーンとは「変化」を意味するモンゴル語で、チベット語のトゥルクに相当する。トゥルクは「変化身」「化身」の意で、慈悲深き高僧が何世にも亙ってこの世に転生して衆生を救うとする信仰であり制度である。清朝末期には、南北モンゴルあわせて一百四十三もの活仏の名跡ができ、代々転生者を輩出した。モンゴル人は活仏を仏の転生者と崇

モンゴル国ガンダン寺の一面四臂開眼観音立像。一九九六年の再建。後の左臂はここからは見えない。

め、日本の現人神にも通ずる絶大な神聖性を有していた。モンゴルでは活仏の歩いた足跡に接吻する信者もいるほどである。

それぞれの活仏は各地で篤く尊崇されたが、その頂点を極めたのはチベットではダライ・ラマであり、モンゴルではジェブツンダンバと呼ばれる活仏の名跡であった。活仏は神聖不可侵でありながら、二〇世紀初頭のジェブツンダンバ八世は、国内外の政治の荒波に揉まれて腐心しただけでなく、身体的な困難にも懐悩した。政治的困難とは、モンゴルを統治しようとするロシア帝国やソ連、中華民国の軍事力であり、宗教の困難とは国内に蔓延し出したモンゴル人民革命党の反宗教的な共産主義イデオロギーであった。さらに身体的な困難とは、治癒せぬ眼病であった。

一九一一年、南北モンゴル（内外蒙古）を支配していた清朝が辛亥革命によって倒れると、八世活仏は眼病平癒を祈願して現・ウランバートルのガンダン寺に観音立像を建立する勅を発した。その像はチベット語でミグチェ・チェンレシと名付けられ、モンゴル語ではメグジド・ジャナライサグと発音された。その意味は「目を開く観音」で、かつて筆者が訳した「開眼観音」は現在、日本語の文献で散見するようになった。開眼観音はチベットやモンゴルでは一般的な一面四臂であるが、その名称と像容を考察すると、この時代のモンゴル独自の特異性が認められる。先の言葉を繰り返せば、経典的根拠の見出しがたい観音菩薩ということである。

その特異性は、まずサイズに隠されている。この立像は屋内仏では世界最大の高さを誇るが、それを決めたのは活仏の手から肘までの長さであった。それを一トホイ（肘）として、像の高さは八十トホイ、約二十六メートルとされた。像の建立にはモンゴル独立の祈願も込められ、素材には贅が極められた。本体は銅で作られ、千二百ラン（両。一ランは約三十七グラム）の金、千五百ランの銀や、四百もの宝石がちりばめられたと伝えられる。金は五センチ四方の金箔七万五千九百二十六枚にされて全身に貼られている。

開眼観音の特異性は、印相と持物に最もよく現れている。印相はサンスクリット語でムドラーといわれ、尊格の手指の形を指す。持物は読んで字のごとく持ち物である。筆者の見る限り、開眼観音の印相と持物は他の尊格には見られぬ独自の形と思想を示している。人間の身体と同じところにある両手は、真手といわれ、またしばしば合掌していることから合掌手ともいう。開眼観音の右の真手は薬指を左の掌に溜めた甘露水に浸し、その水で眼の病を浄める形を示している。背後の二臂のうち右手には銀の水瓶を持ち、その中には一切衆生の暗愚を浄める甘露水が入っている。背後の左手には銀の宝鏡を持ち、夜分に一切衆生を照らして、その苦と病を治療するとされた。また、四臂にはブッダの故地インド産の布を纏っている。

モンゴルの聖俗・官民挙げて建立した開眼観音であったが、共産主義政権時代には非運に見舞われた。国のトップに登り詰めたチョイバルサンは、一九三八年、各地の寺院を閉鎖し僧侶を粛清したうえ、観音像を同志ソ連に寄贈してしまった。後年、判明したことだが、像は溶かされ機関銃の弾丸にされたという。ガンダン寺の観音堂に祀られているのは同形の立像で、一九九六年に国民の悲願により内外に寄付を募って再建されたものである。その最大の願は国の自主独立とされている。これもまた観音菩薩の汎用性の一例といえよう。

院内散歩 ㉗

～薬王院の展示物～

木版画　『北山杉』
作・井堂雅夫

高尾山への講中参拝

高尾山有喜講　講元　落合　龍太郎

平成二十六年より高尾山薬王院の筆頭総代という重責を仰せつかっております。

今では観光地として知られる高尾山ですが、本来は修験道の根本道場であり、人々が心のよりどころとして崇める信仰の霊山です。高尾山薬王院は、今を遡ること壱千二百七十有余年前の奈良時代、天平十六年に聖武天皇の勅願により日本を代表する高僧、行基菩薩により、関東鎮護の総祈祷所として薬師如来を安置し開山しました。以来、連綿と今日までお寺が続いています。現在の宗派は弘法大師空海の教えを守る真言宗智山派で、成田山や川崎大師と同じ大本山として多くの参拝者が訪れています。

今日における高尾山信仰の発展の推進となった基盤は講中（講社）参拝です。江戸中期以降、再々に渡る江戸市中への出開帳により江戸町民から信仰を集め、先達という宗教的指導者の案内により、講元と呼ばれる責任者のもと多くの講（寺社を参拝する信心の集い）が作られました。当時の講員名簿からは、参拝者は江戸町民をはじめ神奈川、埼玉、群馬、茨城、山梨、栃木など関東一円に及び、新年の元旦から大晦日を通じて講中参拝で賑わいました。その後、講中は昭和元年から昭和二十年代まで増え続け、戦前戦中を除き、戦後の高度経済成長に伴い昭和三十年代から昭和六十年まで急増しました。

現在の大本山薬王院の講社規定では「講社は三十名以上の講員をもって組織し、毎年一回もしくは数回便宜の時期を計り大本山へ参拝する」と定められています。

しかし、平成の初期から半ばにかけ、高齢化や後継者不足による講員人口の減少、更には若年層の宗教離れといった理由から徐々に講中の解散が増え始め、隆盛期には五百団体をこえた講中も、現在では百団体程までに減少してしまいました。高尾山のお膝元である我が町、八王子にも多くの講中が存在していましたが、現在は数える程までに激減しています。

そのような折り、先の筆頭総代である私の父、落合清は高尾山に自身の講中設立を常に願いながら、平成二十六年に志半ばで他界しました。しかし、先祖代々伝わる高尾山への篤い信仰を私が断絶してはならないという思いと、また先代のご友人達の講社設立への後押しもあり、不肖私が講元として平成二十八年に、主に八王子市内で活躍する経営者を中心とした新たな講中「高尾山有喜講」を発足しました。

講名の「有喜」とは、薬王院の寺号である有喜寺の二文字を大山御貫首より賜ったものです。毎年五月には、町場の寺社とは一味違った高尾山独自ともいえる山伏の先達が吹く勇壮な法螺貝の音に導かれながら参拝を行います。また、参拝後に大本坊でいただく高尾山名物の精進料理も講中参拝の魅力の一つとなっています。このように講中での参拝は、個人での参拝とはまた違った楽しさや喜びを感じることができます。

とかく我々三、四十代の働き盛りと言われる世代は、誰しもが向上心や競争力といったビジネスや、自己啓発でよく使用される言葉を常に意識しながら生きていかなければなりません。しかし時に私は我々世代のそのような画一的な考え方が、今日の世の中のあまりにも殺伐とした雰囲気を作り出しているのではないかと思う時があります。

競争社会に生きているからこそ、時には世間の雑踏をしばし忘れ、我が身を省みて、自分自身を取りまく全ての環境に感謝の念を抱きながら世の安穏を講員同士で共に祈る。こうした、ささやかともいえる行いも、今の世の中には大切なことだと思います。講中での参拝が有難いと思うのは、目に見えない尊い存在である神仏の前でお互いが真実を述べながら、善意の真心をさらけ出すひとときを過ごすことができるからです。このことが、単に講という枠にとらわれず、もっともっと奥行きのある人間関係を築けるのではないだろうかと思っています。

私や私の家族が日頃より八王子消化器病院に大変お世話になっているといったご縁もあり、病院の理事の久野様、事務長の大津様には、第一回目より高尾山有喜講による講中参拝にご参加いただいております。また「八王子消化器病院友の会」の青木会長には、高尾山有喜講の役員もお勤めいただいております。大変有難いことと深く感謝をいたすと共に、皆様には講中が続く限り高尾山にお参りいただきたいと切に願っております。

二十一世紀は心の時代と言われる中で、機会がございましたら、「おおるり」をご愛読されている皆様も、是非ご一緒に高尾山への講中参拝をおすすめ致します。

（八王子消化器病院ニュース第六十一号より転載）

法話を聴聞する高尾山有喜講の皆様

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「元気いっぱいの春」

八王子市　栃谷玲子　様

高尾山　季節散歩

暦の言葉

「七十二候」

蚯蚓出（みみずいずる）

五月十日～五月十四日頃

この時期にはミミズが冬眠から覚め、土の上に這い出して来る。

ミミズとは「目見えず」を語源としている。見た目からあまり人気がない昆虫であるが、農業の上では土を肥やして土壌改良してくれる、益虫として重宝されている。

今月の風物詩

柏餅（かしわもち）

柏餅が生まれたのは江戸時代中頃の江戸です。

柏の葉は若い目が出ないと古い葉が落ちないということから、家の跡継ぎが絶えないようにという縁起を担ぎ、端午の節句には「子孫繁栄」を願って食されております。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

七十六段　怒りは人間関係を壊す

自分の思い通りにならない時、腹が立ってしまう瞬間は誰しもあるものです。しかし、怒り方次第では、人間関係に支障を生じさせてしまいます。自分と他者の価値観の違いを意識して怒りの感情と上手に付き合いましょう。

第百十六回　高尾山信徒峰中修行会　六月一日(土)～二日(日)

入梅の高尾山へ一泊し当山独自の滝行をはじめ、月輪観・写経・法話の聴講等を実践する精神修養の行事として【高尾山信徒峰中修行会】を来たる六月一日～二日に開催します。

高尾山に広がる大自然全体を修行道場として、高尾山御本尊・飯縄大権現様に身をまかせ、古来より伝承される修行の方法を実践し、激動の現代社会に生きるご自身の心の波を静めてみませんか？

老若男女を問わず初心者の方も歓迎します。

参加ご希望の方は、ハガキに郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・生年月日・電話番号を明記してお送り下さい。（尚、小学生以下の参加は保護者の同伴が必要となります。）

皆様方のご参加をお待ち申し上げております。

＊お電話にての申込みはご遠慮下さい。

＊請書は、締切り後、発送致します。

日程表

6月1日(土)

8:30	高尾山麓不動院集合・受付
9:00	お授け
10:00	開会式
10:30	行程説明
11:00	昼食(各自持参弁当)
11:30	回峰行
12:30	両滝にて水行 ※男女で分ける
14:30	両滝道場発足／仏舎利にて合流
15:30	薬王院到着
17:00	千巻経
18:00	夕　食
18:30	風　呂
20:00	月輪観
21:00	就　寝

2日(日)

5:00	起　床
5:30	朝勤・諸堂参拝
7:00	朝　食
8:00	写経
10:00	法話聴聞
12:00	昼　食
13:00	下　山
14:30	柴燈大護摩
15:30	閉会式

宛先　〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二二七七
高尾山信徒峰中修行会係宛

電話　〇四二―六六一―一一五

FAX　〇四二―六六四―二九九

申し込み締め切り　五月二十四日(金)

参加費　大人　一万五千円
子供　一万円(小学生以下)
＊保険料含

申込み後、キャンセルの方は、早めに電話連絡を入れて下さい。連絡なき場合は、キャンセル料等がかかる(発生する)場合がございますので、ご了承下さい。

集合場所　高尾山麓不動院
午前九時半集合

服装　運動着
運動靴(登山靴可)

持参品　弁当(初日昼食分)
雨具(カッパ、ポンチョ)
洗面用具、タオル、
寝間着、リュックサック
筆記用具
＊お持ちの方は、念珠、錫杖をご持参下さい。

高尾山子供やまぶし修行体験会

高尾山へ古来より伝わる、やまぶしの修行を体験してみませんか？山に広がる大自然の中で、やまぶしと共に滝に打たれたり、山歩きをして困難や試練に耐える強い心を鍛えてみましょう。夏休みの思い出作りとしても、是非ご参加下さい！

記

日時　令和元年八月四日(日)

場所　高尾山麓不動院　午前八時集合

参加費　五千円

対象者　小学生　定員八十名

申込期間　五月三十一日(金)より七月二十六日(金)まで

行程　出発―滝行(琵琶滝)―山歩き(自然研究路)―食事・腕輪念珠作り(薬王院)―柴燈護摩修行参加(有喜苑)―下山(ケーブルカー使用)・不動院到着・解散(午後四時半頃)

＊定員八十名(先着順)とさせて頂きます。

＊ご参加希望の方は、先の連絡先までハガキにて、参加児童の氏名・学年・性別・住所・電話番号・緊急連絡先を必ず明記の上お申込下さい。

以上

〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七番地
高尾山秀峰会事務局
電話(〇四二)―六六一―一一五
FAX(〇四二)―六六四―一一九九

富士登拝修行　代参守のご案内

富士登拝修行は平成十九年に執行され、本年で十三度目の登拝となり、本年も七月三日～七月八日の行程で、高尾山麓から富士山頂へ登拝修行を執行致します。例年の如く徒歩練行にあたり、代参守りを有縁の皆様方に授与致します。

この代参守は、高尾山御本尊・飯縄大権現様から富士山まで続く祈りの道を、修験者によって歩いて運ばれるものです。

道中、各参拝所で、東日本大震災により被災された方々のご安全、被災地の早期復興、国土安穏の祈りを込めながら、富士山頂での法楽においては、申込者の御芳名を読み上げ、諸願の成就を祈念いたします。その後、高尾山麓での成満柴燈大護摩供にて御守を御加持したのち、登拝修行期間中、御宝前にて祈願されている碑伝(ひでん)(木札)と共にお授け致します。

古式に則り高尾山より歩いて参拝する、富士詣『霊峰富士登拝修行』の代参守、本年一年の、諸縁吉祥・諸願円満の為に、ここに御案内致します。

尚、代参守は高所運搬が伴うため、数量に限りがありますことを予めご了承ください。

授与料　代参守と碑伝合わせて一体壱千円以上

申し込み　山上・お護摩受付所又は、葉書に、郵便番号・住所・氏名(富士山頂にて御芳名の読み上げを致しますので必ずフリガナを明記して下さい。)電話番号を明記して、左記までお申し込み下さい。

締切　六月三十日(日)

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二二七七
大本山高尾山薬王院内
富士登拝事務局

三代句碑法楽会　四月二十二日(月)

四月二十二日、俳人の星野椿先生と御子息の高士先生（俳誌『玉藻』主宰）が来山され、境内の天狗像脇にて「星野家三代句碑法楽会」が執り行われました。

この場所には、明治時代の俳人・高浜虚子の次女である星野立子様と椿先生、高士先生の親子三代に渡り、次のように俳句が刻まれた句碑がそれぞれ建立されております。

春風にのり　大天狗　小天狗　立子

春風や　森羅万象　瑞々し　椿

富士道といふ　古道にも風光る　高士

句碑を背にして撮影する高士先生(左)と椿先生

登山だより

■六月行事日程■

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

一日、十三日、二十五日
弁天様御縁日

一日～二日
信徒峰中修行会

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

十八日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

十九日
納札供養柴燈大護摩供
（十三時祈祷殿広場）

二十二日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

三十日
高尾山とんとんむかし「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

二十八日
奥之院開扉供養
（十時奥之院）

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。

尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

（4月15日～10月31日まで）

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫 115

オオヤマトンボ

日本最大のトンボであるオニヤンマは昔から親しまれていますが、オニヤンマによく似た種が結構います。

名前がよく似ているコオニヤンマは、その名のようにオニヤンマを一回り小さくしたような大型種で遠目で見るとよく似ていますが、実はサナエトンボの最大種で、近くで比べてみると違いは歴然としています。

一番オニヤンマと間違えてしまうトンボはオオヤマトンボだと思います。

エメラルドのように美しい目と、黄色と黒の段だら模様はまさにオニヤンマのそっくりさんで、トンボに詳しい人でないと見分けが難しいかも知れません。今は夏休みの宿題に昆虫採集した標本を学校に提出する子供は非常に少ないと思いますが、オオヤマトンボがオニヤンマとして出品される可能性は高く、おそらく先生も違うと気がつかないでことでしょう。

本種はヤマトンボの仲間で、開けた池や沼のような環境でよく見かけます。

私自身も幼少の頃はオニヤンマの小型個体と思い込んでいて、時に民家の玄関先や風呂場に飛び込んでくるフレンドリーなトンボです。

（撮影・文　松島　孝）

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

所沢市　野村　綱二
川崎市　小宮　道夫
八王子市　田中　昭夫
板橋区　榎本阿古太郎
新座市　髙橋　久子
深谷市　中澤　裕一
仙台市　小山田　良照
八王子市　神田　辰男
本庄市　岩崎　セイ子
川崎市　二瓶　久子
所沢市　仲　亨子
熊谷市　中山　多重
飯能市　土屋　秀子
世田谷区　水田　文敏
日野市　野村　博敏
所沢市　市川　昇
八王子市　守屋　直
北区　鈴木　あい子
立川市　小坂　金重
高尾山健康登山者一同

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp